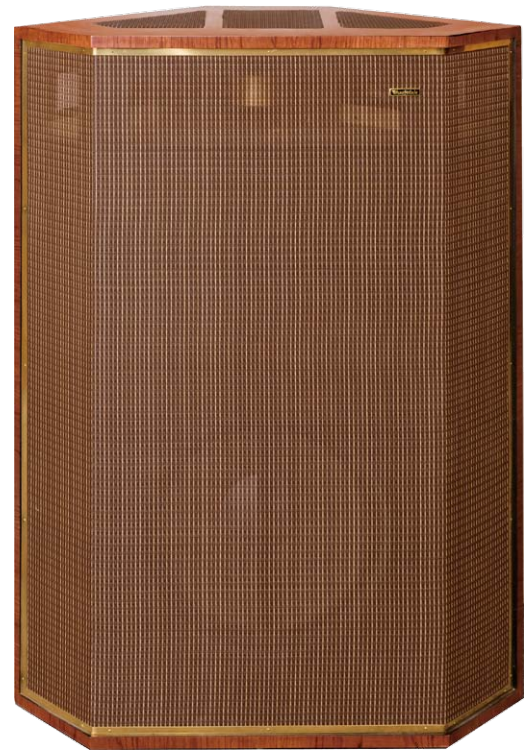




キャビネット後側の上部にトゥイーターとミッドレンジ用のアッティネーターのツマミが搭載されており、その両サイドにも四角いポートが開けられている。スリットタイプのバスレフポートはコーナーにセットすると壁と本体の隙間から壁を反射して低音が部屋に放出される仕組み



キャビネット上部の前3面には四角いポートがあり、こちらからもユニット後部からの音が放出される。38cmに変更されたウーファーユニットはキャビネットのかなり下部に搭載されている。また、写真では見えないが、本体にはキャスターが装備されている。サイズは650W×340D×1,010Hmm

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は英国 Wharfedale 社の最高峰「Airdale」の後期型モデルを紹介していこう。

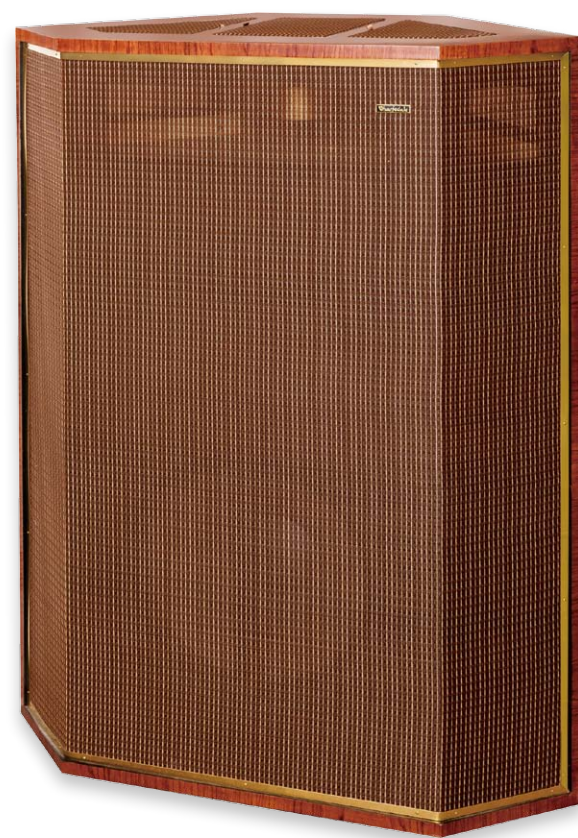
第38回 Wharfedale / W-4 Airdale

Wharfedale Wharfedale 社は1932年にギルバート・A・ブリッグスによってイギリスのヨークシャー州に設立された。英国では Goodmans 社とともに最も古いスピーカーメーカーである。彼は音響学者としても1948年にスピーカー設計の理論書を書き上げていたり、スタインウェイ使用の名ピアニストとしても知られていました。1950年にはロンドンのフェスティバルホールで聴衆者の前でオーケストラと自社のスピーカーの聴き比べを行い、とても高い評価を得ている。日本ではSuper-8や12といったフルレンジスピーカーが良く知られているが、システムとしてはほとんど紹介されていない。

本文 / 林 正儀 製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

W-4 Airdale 後期型

以前このページでも紹介した同社のフラッグシップモデル「エアデール」の後期型。音場型のスピーカーシステムで、キャビネット後部にスリットタイプのバスレフポートが複数あり、部屋のコーナーにセッティングすることで、より臨場感のあるサウンドが聴ける。前期型よりもキャビネットが全体的にひとまわり大きくなっていて、外観やキャビネット構造は同じながらユニット構成が変更されている。トゥイーターはどちらも同じタイプで上向き。前期型は2個の10cmミッドレンジが左右に分かれて前方に向けて搭載されていたが、後期型はより大きな20cmを1個に変更され、トゥイーター同様に上向きに搭載されている。ウーファーも30cmから38cmと大型になり、より豊かな低音再生を可能にしている



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Wharfedale / W-4 Airdale



アッティネーターの板を外すと強力なマグネットを持つトゥイーター、ミッドレンジユニット、大型のコイルとオイルコンデンサーで構成されたネットワークが確認できる

上から見ると六角形になっていてユニットの正面が確認できる。トゥイーター、ミッドレンジはどちらも紙製の振動板である。また、この後期型はトゥイーターのセンターキャップがアルミに変更されており、より高域の繊細な表現が可能になっている



サラネットの右上に配置されたブランドのロゴ



降りそそぐ空気感が心地いい
エアデールの魔法にかかった

エアデールは僕の憧れだ。そもそもワーフェール(1932年の創立)というブランドは、タンノイやJBLとはひと味違う斬新な構成の音場型スピーカーで一世を風靡。当時スーパー8というフルレンジユニットしか買えなかった学生の身には眩し過ぎる存在だった。

そういえば菅野沖彦さんが「コーナー型として設計された3ウェイシステム・エアデールを左右に4本ずつ。マランツ7T+モデル15で鳴らす夢のコンビネーション」としてシステム提案をしていた。海外ではありえない奇抜さだが、上向きにセットされた中、高域のユニットが360度に拡散される理屈を思えば、なんだか納得してしまう。

対面したのは1960年代の後期型(ステレオ時代)だ。嬉しくなるほどいいねいにレストアされていて、金色のフレームやトップに設けた新感覚のサラネット(メンテのため着脱可能)など、デザイン的にカッコいいと思う。もう60年近く昔のものだし、いくらオリジナルがいいといっても限度がある。

「一回こうしてきれいにすればお客さんが大事にしてくれますから」
ビンテージに対する考え方を岡田さんに教えられた感じである。リークの真空管セパレートアンプに灯がともり、さすがに15インチウーファーらしい、コシの座った堂々たる低音域だ。紙のコーン

で3ウェイを構成している狙い通り、エネルギーバランス的にも音色的にも大変スムーズで、切れ目なくサウンドが流れてゆく。いやいやオーディオを忘れ、ここは好きなジャズ、クラシックやロックで音楽に没頭する時間を過ごしたいものだ。ひとときではあるが……。

いきなりレイ・チャールズ+ナタリー・コールで濃いジャズに引き込まれる。太いタミ声のいがらっぽさや(咳き込みそう)パワフルで妖艶な表情がベリーグッド。オスカー・ピーターソンは「コロコバード」の軽快なポッサについて体が動いたりして、2管の強靭なスーパーレイに圧倒されるのがマンハッタン・ジャズ・クインテットだ。聴覚につき刺さるサクサクアプロウ。デビッド・マッシュューズの絶妙なピアノがたまらんゾ。ブルーノート

筆者はもともとクラシック一辺倒だったから「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」なんて耳タコ……。のはずが、鳴りっぷりがよい。響くそしてくつきりとヌケ出す艶のある弦。そのみずみずしい重なりといい、上から降りそそぐ空気感も心地よく、エアデールの魔法にかかった感じである。ピートルズもステイ

ングもナイスマッチで大拍手ものだ。
これでペアで95万円なら、財布の紐が緩みそうである。部屋の余裕さえあればだが、憧れの銘機を迎えられたら嬉しい。